

松江・田原神社の児連れ獅子像について

藤 脇 久 稔*
岡 崎 雄二郎**

1. 児連れ獅子の概要

当社は、松江市奥谷町に鎮座する。本殿は、東西両殿からなり、東殿に『出雲国風土記』に所載される田原社を、西殿に元亀田山にあった宇賀三處荒神を祀る春日造連結社殿で、隨神門は重要な建造物として松江市の文化財に指定されている。

獅子像は、三の鳥居を潜ってすぐその両脇にある。⁽¹⁾ 今回紹介するのは、右手にある阿の像である。台座は三段あり、最下段は、三層の来待石の切石積となっている。平面の寸法は152×196cm、現地面からの高さ約1mを測る。

その上の台石は、平面121×160cm、高さ41cmの2個の来待石の切石からなる。正面中央には、「細工人 石屋乙右衛門」と作人の名が陰刻してある。最上段は、平面82cm×122cm、高さ42cmを測る1個の来待石で、4面とも棹で囲まれた区画の中に牡丹文が陽刻され、正面中央には「奉」の一字が陽刻されている。下部には、渦巻様の彫刻が施され四脚の台石となっている。

その上にどっしりと構える親獅子は、来待石製で斜め左方向をしっかと見据え大きな口を開いて敵を威嚇している。頭毛が両側の耳のあたりで異常にふくらんで誇張されているのが特徴的である。

児獅子は、やはり来待石製で3匹おり、1匹が親獅子の前足の間にいて、敵に恐れおののき親の左足にすがり、顔は前を向いている。2匹目と3匹目は親の左足先にまつわりついている。正面手前の児は親の方へ振り向き、奥の児は後ろ足を上げて南方を威嚇している。この部分は、別個の来待石（平面36×33cm）で作られ床面は厚み4cmあり、下の台石から南側が10cm、西側（正面）が3.6cmほど出っ張っている。又、石全体は下の台石にはめ込まれている。当初からこういう手の込んだ細工を考えた結果なのがあるいは親獅子と同じ石続きでの児獅子の彫刻に一度失敗した結果なのであろうかよくわからない。像の高さは約180cm、台座を含めた総高は約363cmとなる。

2. 製作の由来

以下は中村家所蔵の冊子（表紙には「過去帳」、本文見出しには「中村家央」とある）に拠って記す。

この冊子は、「石工 乙右衛門」の曾孫である中村賢一氏（平成4年、九十五歳にて没）によって記録されたものである。

中村家は飯石郡より出て、松江の寺町にて魚商を営む。文政年間より現石橋町二丁目四九番地に住す。児連れ獅子の作人乙右衛門は、文化十四年（1817年）門脇佐四郎の三男として生まれ、明治二十二年二月十日没、享年七十三歳。同人は、中村家へ入り婿し、松平家に仕える。十六歳の時、小人（使役の用に充てられた役）として参勤交代に供し江戸に行く。十九歳で小人役を辞し、

江戸傳馬町で駕籠かきとなる。（この時期、石造品についての見聞きを広めたらしい、と中村賢一氏は語られたことがある。）

三十五歳で帰松し、兄、林兵衛に習い石工となる。「家央」には「頭脳明晰、手が器用で、市中一二を争う名匠となり、同人（乙右衛門）の彫刻したる物の内、当氏神田原神社の大、中二対の唐獅子、又、松江神社・城山稲荷両社、賣豆紀神社、美保関神社の女神などが最も名の出た物である」と記されている。

又、現在の中村家に保存されている掛け軸を見ると、上半部に阿の方の児連れ獅子の下絵と考えられる絵が描かれており、図中右側に「惣高サ壱丈壱尺五寸」（約345cm）⁽⁴⁾と記載されている。又、掛け軸の右下には別紙で灯籠の絵が、左下にはこれまた別紙で「嘉永三年 戊歳改 石屋 乙右衛門」^{(2) (3)}とある。

下絵には三匹の児獅子が描かれているが、現物と比較すると位置や格好に差異がある。又、親獅子の向きも違う。しかし、これが実際に彫刻する前の下絵、あるいは江戸在住当時に当地にあったものを書写したものと解釈すれば、ある程度納得がいく。いずれにしても、石屋乙右衛門が田原神社の児連れ獅子の阿像を製作するに際し、そのモデルにしたものとしてほぼ間違いないなかろう。

以上、現物の観察と二点の関係史料により、当神社の児連れ獅子は嘉永三年（1850年）に、石橋町の石工、石屋乙右衛門が製作したものであることが判明した。

3. 修理の経緯

児連れ獅子の内、神社下の鳥居を潜った右手にある阿像（口をあける）のほうは、頂上部を松の枝にこすられるうちに水や霜が浸水し、ついに頭部前面が剥落してしまった。そこで、今から二十年ほど前に頭部の補修を試みた。モルタルなどでは不細工な上に接着しかねるため、奈良国立文化財研究所へこの修理方法を問い合わせた。当時エジプトのアスワンハイダム建設に伴い神像を分割し移動させようという移築工事の折り、神像の合成に際し、スイスで開発された接着剤が使用されたとの教示があり、研究所からその接着剤を分けていただいた。そして、次の工程で補修を試みた。

- (1) 元の写真と剥落した顔面を参考にして、顔面（頬より上）を奥谷町の大工山本勝己氏に依頼し木彫した。
- (2) これを鉄棒にて2箇所貫き、接着剤を用い本体と接着させた。
- (3) 木部に前記接着防水剤で来待石の石粉をこねて塗布した。

しかし、それから十数年を経過し塗布した来待石の石粉の粒子の粗さのためもあってか再び腐食が見えはじめ顔部剥落の様子が見えた。

平成八年、代々お宮の石工事に関わられる北堀町の藤井賢氏により、木部剥落部を含む頭部、顔部全体を来待石で彫刻し、上部から据えた。藤井氏によると「頭だけでも並みの狛犬一体分の石材」とのことであった。施工費は約七十万円。像は大きさといい、児獅子を配した意匠といい、出雲地方はもとより全国的にも希なものであると云われている。



掛軸部分と銘文拓本



掛け軸



手前 うんの像　奥 阿の像



阿の像　正面左斜めから見る



阿の像　正面右斜めから見る

註

- (1) 昭和48年9月刊の伊藤菊之輔著「島根の石造美術」に紹介されている。児連れ獅子は、今は境内地最南部にあるが、もとは旧参道石段（女段）の中途で宮司宅東角に阿の像が南面し、吽（うん）の像が北面してあったことが、古い境内地平面図から知られる。日清戦争以後、元家中屋敷であったところを境内地に拡張され獅子も現在地に移設されたものである。
- (2) 田原神社境内には、参道沿いに四対の唐獅子が配置してあるが、「中村家央」の文中、「大」の獅子とは恐らくこれを指すものと思われる。唐獅子としては最大級であろう。
- (3) 境内の手水舎脇に1対の「勇み獅子」—後ろ足を踏んばった立像で、社伝では界限の石工はこれをお手本として製作に励んだという。一が「中村家央」のいう、「中」の獅子であろうか。
- (4) 上半部の児連れ獅子の下絵は台座の途中で切断されている。恐らく当初は台座も完全に表現されており、吽（うん）の像と1対の絵としてさらに、「嘉永三年 成歳改 石屋乙右衛門」の墨書も紙端に記されていたのではないだろうか。

補注 鹿像修復について

上記「児連れ獅子」阿像頭部欠損部を、木彫による修復工事の際、併せて隨神門南側の台座上にある雌鹿像の口辺を修復した。

来待石製鹿像雌雄一対の製作年代は明らかではないが、江戸期に口辺部が欠落したために、御本殿床下に収蔵してあった。

この石製鹿像の台座に、後年（江戸期）銅製のものが一对置かれてあったが、第2次世界大戦で供出し台座は空になっていた。そこへ再び石像を遷座することにした。

雌鹿像は、前後の脚間約50cm、高さ75cm、口辺欠損部は径（元部）・長さとも円錐形の約10cm。

欠損部は藤井賢氏（北堀町）が来待石で補作し、前述の接着材を用いた。また、雌雄像全面にこの薬剤を塗布した。結果、以後20年が経過したが接合部は安定しており、補填部は古色を帯び、本体部とは一見みわけがつかなくなっている。

* 松江市奥谷町121番地 田原神社宮司

** 松江市教育委員会文化財室勤務